

1 課題名 日本周辺国際魚類資源調査委託

2 区分 受託

3 期間 平成 18 年度～

4 担当 企画情報部 (御所豊穂)

5 目的

本事業は日本周辺国際魚類資源の安定的な利用確保のため、科学的データの整備を目的とし、水産総合研究センターからの再委託を受け、遠洋水産研究所を中心に全国的な組織で実施されている。この内、本県はカツオやマグロ・カジキ類の水揚状況や生物特性の調査を行った。

6 成果の要約

(1) 試験の方法

カツオについては、ひき縄漁での水揚量が多い和歌山東漁業協同組合本所 (以下、串本市場)、和歌山南漁業協同組合すさみ支所 (以下、すさみ市場)、和歌山南漁業協同組合本所 (以下、田辺市場) の伝票を整理し、水揚量調査を実施した。また、串本市場では、体長測定を行った。

マグロ・カジキ類については、勝浦漁業協同組合 (以下、勝浦市場) の伝票を整理し、水揚量調査を実施するとともに、体長と体重を測定した。なお、体重については、勝浦漁業協同組合職員による測定値 (入札重量) を用いた。

(2) 成果の概要

ア カツオ漁況

串本、すさみ、田辺市場の合計カツオ水揚量は、2007 年 1～2 月は 16 トンと低調な出だしであった。盛漁期となる 3～5 月には 302 トンで、1981 年以降では下位から 2 番目と極めて不漁となった。一方、8～12 月の水揚量は 82 トンで、とくに 11 月は 70.2 トンと好漁であった (図 1)。2007 年計は 404.5 トンと 1981 年以降の最下位であった。

イ マグロ類漁況

2007 年の勝浦市場におけるマグロ類水揚量は、クロマグロ (成魚) が、212 トンで、2006 年を 50 トン上回った。キハダは、1999 年以降減少傾向が続く。2007 年は 1,198 トンになった。メバチは、1,500 トン前後で比較的安定しており、2007 年には 1,365 トンで、この内 12～3 月に多かった。ビンナガは、1998 年以降減少傾向が続いたが、2007 年には 7,345 トンと、2006 年に比べて 1,111 トン増加した (図 2)。また、2007 年度からクロマグロの資源量計算の精度向上を目的とした高齢魚の年齢査定調査を行うこととなった。このため現地市場 (本県では勝浦市場) で体長と体重を測定したクロマ

グロの頭部に個体識別するための標識を装着した。標識個体の頭部が築地市場で回収されることで耳石を採集して年齢査定ができる。

ウ カジキ類漁況

勝浦市場のカジキ類水揚量は、クロカジキが最も多く、メカジキ、マカジキと続き、この 3 種で大部分を占めている。これらの優占種は周年水揚されているが、クロカジキは夏季、メカジキは冬～春季、マカジキは春季に多く水揚げされる。メカジキは、近年若干増加傾向となり、2007 年には 317 トンであった。マカジキ、クロカジキ、バショウカジキは近年減少傾向が続いたが 2007 年は増加に転じマカジキは 168 トン、クロカジキは 471 トン、シロカジキは 4.2 トン、バショウカジキは 2.8 トンとなった。フウライカジキはあまり水揚されることがなく、0～1.5 トンの範囲で推移している (図 3)。

7 成果の取り扱い

(1) 成果の普及

成果報告会等で曳縄漁業者にカツオとビンナガの近年の漁況の特徴や資源状態についての情報を提供した。また、各種データは遠洋水産研究所およびエヌ・ユー・エス株式会社に送付した。

(2) 成果の発表

平成 19 年度日本周辺国際魚類資源調査委託事業報告書、平成 19 年カツオ資源会議報告書、平成 19 年度ビンナガ資源来遊動向検討会報告書

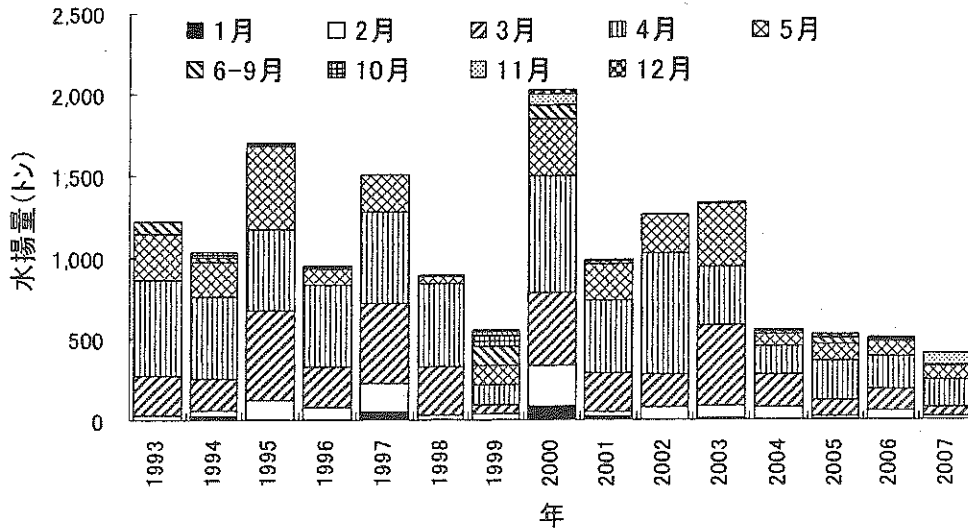


図1 ひき縄による串本・すさみ・田辺市場のカツオ水揚量の月別経年変化

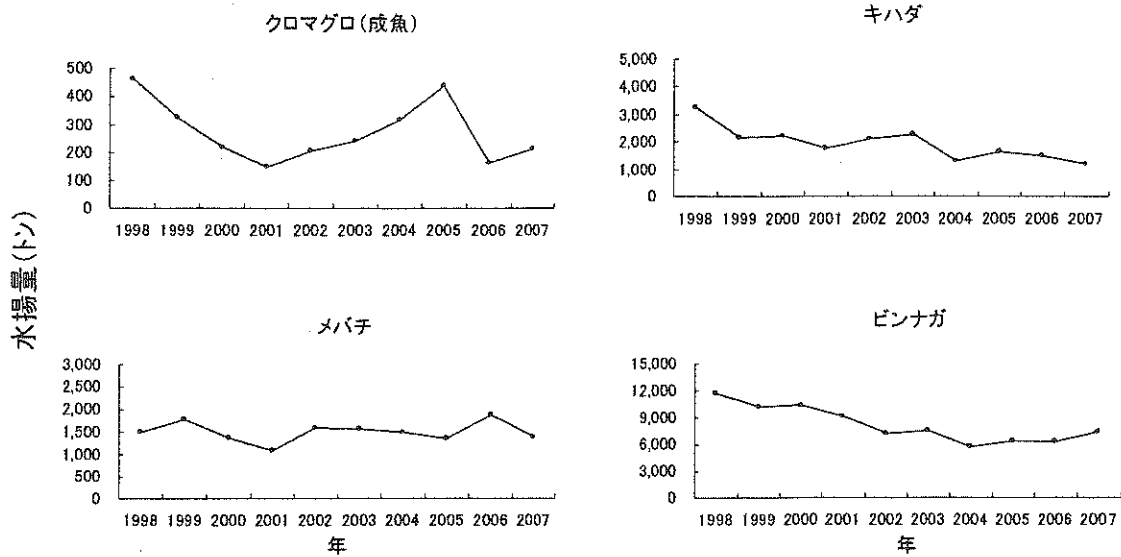


図2 マグロ類水揚量の経年変化(勝浦市場, 近海+沿岸まぐろはえ縄・その他のはえ縄)

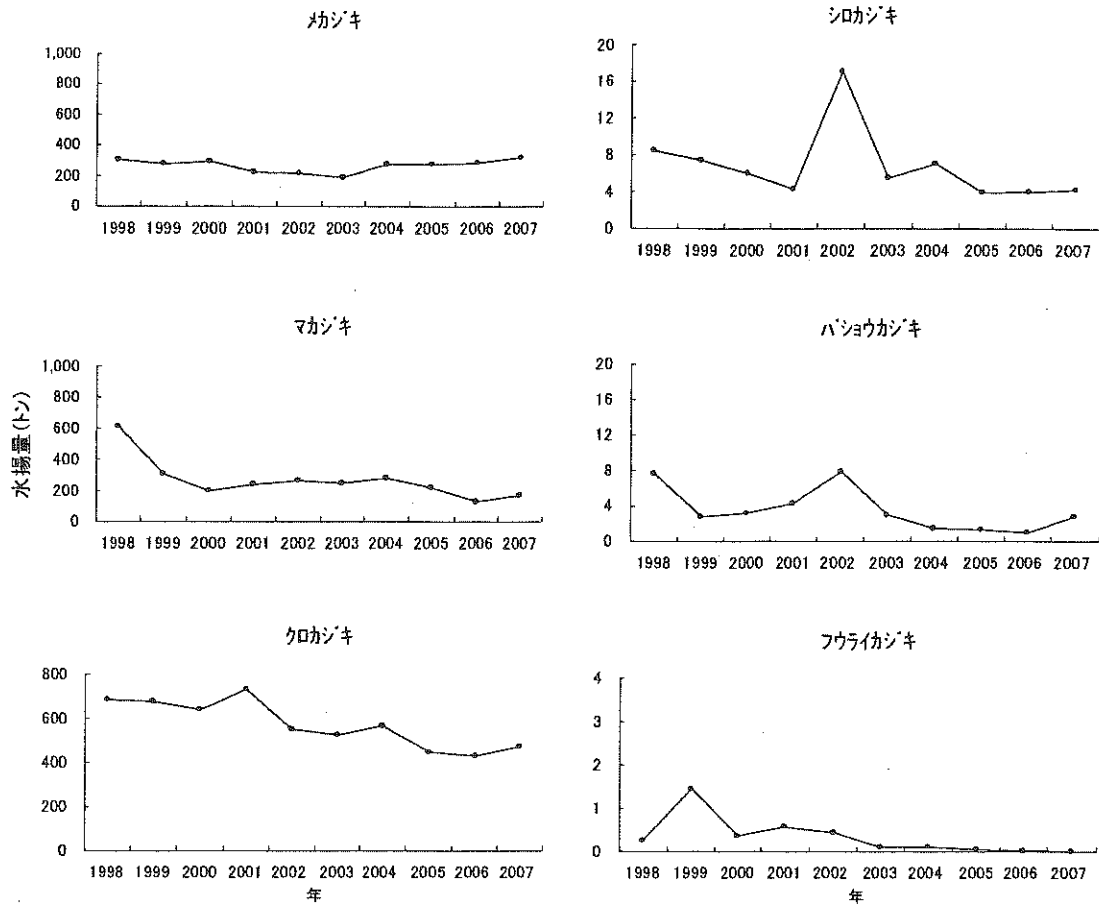


図3 カジキ類の水揚量の経年変化 (勝浦市場, 近海+沿岸まぐろはえ縄・その他のはえ縄)